

自己の探求

——自己の時間に関する試論・長田弘を手がかりとして——

和 田 渡

I 序論

おそらく、様々な問いのなかで「時間とは何か」という問いは最も魅力的なもののひとつに違いない。古代から現代にいたるまで、数限りない人間がこの問いに魅了されている。なかでもアウグスティヌスによる「時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです⁽¹⁾」という告白は、時間の謎めいた特徴を浮き彫りにするものとして代表的なものである。それが示唆しているのは、もつとも身近で、もつとも親しく、よくわかっていると見えたものが、ひとたび問いに付すや、実はもつとも答えに窮するものになるということである。たしかに、日常生活の進行を円滑にするものとして、「時間」は不可欠な要素である。誰の口からも時間が語られ、誰もがそれを相互に共通なもの、自明なものとして前提している。しかし、アウグスティヌスのように、ひとた

び「時間とは何か」を正面きつて問題にし始めると、時間は困難な問いへと変わってしまうのである。

時間については多種多様な問いかけ方が可能であり、問いに応じて異なる答え方が無数に生じてくるであろう。つまり、「時間とは何か」という問いに対する一義的な答えはどこにもないということである。それぞれの人が、自分の関心に応じて問い、答えようとする試みだけが引き継がれていくのである。時間について、たとえば「客観的時間とは何か」を問題にする人がいれば、「主観的、心理的な時間」、「状況に応じて伸び縮みすると感じられる時間」を問題にする人もいるであろう。前者の問いは、たとえば物理学的な意味での時間測定の可能性に結びつけられる限りでは、時間を問題にしている自己そのものへの問いと結びつくことはない。しかし、後者の問いは、とりわけ自己と時間の関係ならびに時間を生きる仕方を問う試みに直結してくる。この場合には、自己の外部に自己の存在とは関係なく存在すると想定された時間が問われるのではなく、自己における時間、自分が意識する

時間が主題化されることになる。ここで言う時間は人間的な意味での変化・生成と同義であり、したがって主観的時間への間いは、自己の内部において起こる出来事に注目し、その変化・生成の様態を記述する試みであると言つてよい。この試みは、言い換えれば、自己の時間、変化・生成を反省し、反省の視線に映る姿をどこまでも言葉によつて表現することであり、自己と時間、変化・生成に関する記述においては、反省的視線をそれらの諸相の細部にまで届かせることが必要である。

そこで以下においては、自己の探究において重要な意味をもつ時間の多様な次元、特に自分によつて生きられる現在と過去の諸相を反省的な考察の対象としてみたい。その手がかりとして、長年にわたつて、詩やエッセー、子供向けの本の翻訳などを通じて独自の世界を展開している長田弘の記憶と時間についての捉え方を検討することを通じて、自己という問題を自己の時間性の諸次元に焦点を定めて考察することが本稿の目指すところである。

Ⅱ 自己の記憶の位相——記憶をつくる経験——

記憶の問題は、ともすれば、過去と結びつけて考えられやすい。記憶は、過ぎ去つた出来事を再現する能力とその働きとして理解されやすいのである。しかし、記憶することと過去を思い出すということは、両者が不可分な関係にあるとしても、一応分けて考えることもできるであろう。記憶することは現在進行形の経

験であり、想起することは、その働きそのものは現在に属することはいえ、想起されるのは、過去化して、もはや現に存在することのないもの、すなわち過去である。記憶するとは、私の現在において私が様々な意識作用を遂行することと同時に、その作用が自分の心に沈澱していく過程であり、別の言い方をすれば、現在から過去へと移行する出来事である。しかし、その現象を反省してみれば直ちにわかるように、そこには多面的で謎めいた側面がある。私

が今、ここで何かを記憶する、心に刻みつける経験において、その何かが自分の望むとおりに記憶されるかどうかは不明であるし、その何かに代えて自分の望まないことが意に反して記憶されるかもしれない。そればかりでなく、そもそも何がどのように記憶されるかは定かではない。私の記憶する意志に逆らうようにして決して記憶されることのないものがあり、私に記憶するつもりがなくとも記憶されるものがある。記憶する経験においては、私の能動的な働きと、意識が私の意志とは無関係に自発的に動く働きが常に相互に絡み合っているのである。私は後者の働きがどのようにして進行しているのかをつまびらかにすることはできないし、私にどのように作用するのかを知ることもしかない。先に謎めいた側面があると述べたのは、このことと関係している。すなわち、私の現在から過去への不断の移行過程においては、私の予測を超えた不可思議な出来事が生起しているのである。この出来事は、いつたん生起した後に、私のなかで異質な展開を見せ、私

を内側から刺激し、急襲し、脅かす場合もある。その力が私に迫る時、私はしばしば無力な生き物と化してしまう。その限りでは、私はたしかにこの出来事によって左右される他はない受身の脆弱な存在でしかない。とは言え、こうした側面を強調する視点は長田には見られないので、この点については、最後の方でも一度改めて検討してみたい。いずれにせよ、私の受動性が際立つようなそうした傾向を別にすれば、私は記憶することに主体的に係わることができるともある。そのことを通じて、自分で自分をつくることも不可能ではないのである。

人間におけるそうした能動、受動という両側面を視野に納めて考える一人が長田弘である。まず、能動的な意味での記憶について考えることから始めよう。『記憶のつくり方』の「あとがき」で長田は次のように述べている。「記憶という土の中に種子を播いて、季節の中で手をかけてそだてることができなければ、ことばはなかなか実らない。じぶんの記憶をよく耕すこと。その記憶の庭にそだつてゆくものが、人生とよばれるものだと思う²」。「記憶のつくり方」という言い方が端的に示しているように、長田にとって、記憶とはまずは自分でつくるものである。記憶の庭を丹念に自分で耕す試みが強調されるのであり、それを土台にして言葉が実ると考えられている。記憶は、ここでは、私の能動的な姿勢によって可能になる生の次元として位置づけられている。この次元は、現在の経験として可能になるが、その経験にとりわけ重要な要素は、積極的に記憶をつくる意志、あるいは記憶を育てる

覚悟であると言つてよいだろう。「じぶんの記憶をよく耕すこと」ができるためには、記憶する意志の過程を大切にしなければならぬのである。しかし、記憶を耕すことが具体的にどうすることかを考えるためには、この言い方だけでは不十分であり、そのために、長田の次の言葉をさらに引用してみよう。「記憶は、自分の心のなかに、自分で書きこむという行為です。『記憶のなか』という言葉は、『このころのなか』と同じ意味をもっています。そのなかに、驚きを書き込む。悲しみを書き込む。喜びを書き込む。そうやって、自分でつくりあげていくのが、記憶です³」。記憶の庭を耕すという行為は、驚きや悲しみ、喜びを自分の心のなかに書き込んでいく行為によって、記憶の土壌を豊かにしていく作業とみなされているのである。この作業の中心には、驚きであれ、悲しみであれ、喜びであれ、自分の現在の生において起きることに注意し、それを深く感受し、可能であれば言葉によって刻みつけていく辛抱強い姿勢がなければならないであろう。この種の作業は、漫然とした生のなかからではなく、一定の自己強制を含み、注意を伴う生のなかから生じてくるものであり、こうした生を維持するためには、記憶形成へと自分を導く意志が必要とされるのである。その意志が首尾よく実現される時に、生の内実がたしかなものになる。「甲は乙のために耕し、乙は丙のために耕すが、だれひとり自分自身を耕す者はいない⁴」と述べたのはセネカであるが、長田にとつても、記憶を耕すことは自分を耕すこと、自分の心の土壌を言葉によって豊かにすることと同義であ

存在の感覚も強まるかもしれない。また、私有の可否にかかわらず、自己を取り巻くすべてのものに心を溶け込ませていくことを通じて、その過程にある自己の存在も意識されるであろう。そうした生の次元は、自己を外へと解放した状態のなかで生きられる時間のなかにゆつくりと身を沈めることによつて可能になるに違いない。そのような時間を生きることの一面を反映させたものに、「自由に必要なものは」と題する次の詩がある。少し長くするが今度は全体を引用してみよう。

不幸とは何も学ばないことだと思ふ

ひとは黙ることを学ばねばならない

沈黙を、いや、沈黙という

もう一つのことを学ばねばならない

楡の木に、櫟の木に学ばねばならない

枝々を揺らす風に学ばねばならない

日の光に、影のつくり方を

川のきれいな水に、泥のつくり方を

ことばがけつして語らない

この世の意味を学ばねばならない

少女も少年も猫も

老いることを学ばねばならない

死んでゆくことを学ばねばならない

もうここにいない人に学ばねばならない

見えないものを見つめなければ
目に見えないものに学ばなければ
怖れることを学ばなければならぬ

古い家具に学ばねばならない

リンゴの木に学ばねばならない

石の上のトカゲに、用心深さを

モンシロチョウに、時の静けさを

馬の、眼差しの深さに学ばねばならない

哀しみの、受けとめ方を学ばねばならない

新しい真実なんてものはない

自由に必要なものは、ただ誠実だけだ^⑨

この詩に明らかのように、記憶するということは、どのようにして自分に固有な時間を固有な仕方では生きることに関わってくる。先に述べた点をあえて繰り返せば、記憶のつくり方とは、ひとえに現在の生き方の問題なのである。その場合に長田が繰り返して強調する「学ぶこと」は、言うまでもなく単に知識を習得することではなく、知恵を身につけることに他ならず、前者が暗記力に依存するとすれば、後者は「考える力」なしには実現しない。生きること、何よりも学ぶことであり、考えることである。ここで、おそらく長田が念頭においている、セネカの次の言葉を引用してもよいであろう。「生きることとは生涯をかけて学ぶべきことである。そして、おそらくそれ以上に不思議に思わ

れるであろうが、生涯をかけて学ぶべきは死ぬことである^⑩。セネカは、しばしば、生きることにのみならず、死ぬことについても何度でも繰り返し返して学ぶこと、考えることの必要性を強調したが、長田においてもその点は変わらない。しかし、長田がセネカと異なるのは、「考えること」に「思考」以上の拡がりをこめている点である。すなわち、長田にとって「考えること」は、まずは森羅万象に共感し、それらを深く感受することから始まり、その意味を考えていく一連の過程である。沈黙の中で、静かに木や日の光と影、水の存在と向き合うこと。家具や、トカゲ、モンシロチョウ、馬に見入ること。さらには、目に見えるものだけでなく、見えないものの存在を感じ取ることが思考の出発点となるのである。思考の源泉には、感受性があり、それは、自己が自己の内と外へ開かれている状態を意味している。外に向かう目には決して見えてこないものを見つめるためには、自己と向き合う反省の時間が必要であり、自己の外にあるものを見るためには注意の時間が必要であるが、いずれの場合にも、自己は内へと閉ざされてはならない。外へと広く開放されていなければならぬのである。閉ざされた状態の自己は、学ぶことなく、自分に固有な時間を生きることからも遠い。学ぶことができるためには、前にも述べたように、立ち止まること、己れを開いて、ものに従うこと、ものを深く感受することができなければならぬ。学ぶことは、まずは感じるることなのである。そして、感じることを出発点として思索が始まるときに、森羅万象の聲が言葉へ

と移されていくのだと言えよう。先にあげた詩は、そうした感受し、学び、考える態度を強調しつつ、人の生きる意味をさりげなく物語っている。まずは、ものとの交流を生き、しかる後に、そこに込められたものについて考えることこそが重要なのである。同様の観点は、「空の下」と題する次の詩にも読み取ることができ

黙る。そして、静けさを集める。

こころの籠を、静けさで一杯にする。

そうやって、時間をきれいにする。

独りでいることができなくてはできない。

静けさのなかには、ひとの

語ることのできない意味がある。

言葉をもたないものらが語る言葉がある。

独りでいることができなくてはいけない。

草の実が語る。樗の木が語る。

曲がつてゆく小道が語る。

真昼の影が語る。ジョウビタキが語る。

独りでいることができなくてはいけない。

時間の速度をゆつくりにするのだ。

考えるとは、ゆつくりとした時間を

いま、ここにつくりだすということだ。

独りでいることができなくてはいけない。

空の青さが語る。賢いクモが語る。

記憶が語る。懐かしい死者たちが語る。

何物もけつして無くなつてしまわない。

独りでいることができなくてはいけない。

この世はうつくしいと言えないかもしれない。

幼いときは、しかしわからなかつた。

この世には、独りでいることができて、

初めてできることがある。ひとは

祈ることができるのだ。^①

この詩においては、先の詩と同様に「記憶のつくり方」がさりげなく語られているが、長田の視点はどちらかと言えば、記憶をつくる場としての自分の心に向けられ、よりよい記憶をつくるために、心の体勢を整えることの重要性が強調されている。長田の言葉で言えば、「こころの籠を静けさで一杯にし、時間をきれいにすること」であり、「時間の速度をゆつくりにする事」であり、そうした時間は、何よりも「独りでいること」の内でも可能になると考えられている。長田の言う孤独は、先にも述べたように、自分のなかに閉じこもり自分以外のものとの関係を絶つことではなく、まずは、語ることのないものの声に耳を傾けることである。そのようにして、草の実や檜の木、小道、空の青さといったものへ心を開くことによつて、時間が濾過されるといふのである。それが可能になるためには、心は沈黙と孤独のなかに保たれ

なければならぬ。そうした状態の持続のなから、草の実や真昼の影が語る言葉が聞こえ始め、それが「考えること」に結びつく。長田によれば、「考えること」とは、今、この場所に、ゆつくりとした時間をつくりだすことであり、その時間のなかで、語ることはないものが語り、もはや語ることはない者が語りだしてくる。そうした言葉に傾聴し、その意味を考えるためには、急いではならない。セネカを連想させる「人生の短さとゆたかさ」と題する詩の最後の二行「ゆつくりと生きなくてはいけない／空が言った。木が言った。風も言った」^②でも強調されているように、自分のなかでの対話と思索の時間を持つためには、忙しくしてはいけないのである。心に森羅万象を受け止めるだけの余裕がなければいけない。いみじくも「忙」という文字が「心が亡びている」ことを表わしているように、多忙と心のゆつくりした活動に他ならない思索とは相容れない。心が記憶や風の言葉を聴くことができるためには、雑事から身を解き放つていなければならぬのである。心に余裕がなければ、何事も心に残らず、むなしく過ぎていくだけである。セネカもこう述べていた。「実際多忙な人にかぎつて、生きること、すなわち良く生きることが最も稀である。また生きることと学ぶことほどむずかしいことはない」^③。

以上で述べたように、記憶するということは現在進行形の経験である。それはまた、長田が強調するように、「感じること」と「考えること」という能動的な働きをつうじて現在の生をより深く生きようとする試みによつて開かれてくる次元でもある。記憶

することは、そうした試みの持続によって主体的に記憶をつくる経験なのである。しかし、能動的な働きは、いつまでも現在にとどまることはできず、現在進行形からやがて完了形へと移行し、次第に過去へと後退していくものであり、この過程においては「記憶すること」よりも「記憶されること」という受動的な働きが重要な役割を果たす。その点について、次に検討してみたい。

Ⅲ 自己の記憶の位相——記憶がつくられる経験——

Ⅱで述べたように、たしかに記憶することが心の注意深い意志的な働きに支えられて可能になるとしても、他方で、記憶する現在の経験はそのつど現在から過去へと移行することを免れえず、われわれはこの移行過程を自由に意のままにすることはできない。意志は注意深く記憶することには関与しえても、その働きが現在から後退していく過程に対してはどうすることもできないのである。つまり、自分で耕した記憶の庭は、その後、それ自身で育つていくものでもある。記憶は、記憶するという能動的過程であると同時に、記憶されるという受動的な過程でもあるのだ。こうした記憶の両義性は、たとえば長田の次の表現にも見て取れる。「記憶というのは硬い固形物のような物ではなくて、それだけのなかに柔らかにかたちづくられてゆきます。記憶というのは、言い換えるなら、それぞれにとつての記憶の仕方です¹⁾。記憶には、柔らかに形づくられていくという側面があり、その過程

に意志的に関与することはできないので、私に許されるのは、その過程が成就するように配慮することだけであり、それが記憶の仕方だといふのである。記憶される過程を配慮するということは、その間の経過を忍耐強く耐えるということに他ならない。忍耐とは、意志の行使の断念であり、私のなかで形づくられていくものの過程が存分に展開されるように待機することでもある。あるいは、私のなかで育つていくものが十分に育つのを辛抱強く待つということである。

とは言え、われわれの経験においては、「記憶すること」が直ちに「記憶されること」へと転化、変換することが避けられないとしても、前者から後者への一方通行的な過程だけがあるのではなく、記憶する働きは記憶されていく過程を意識しながら記憶の向きを遂行していくものであり、その意味で後者から前者へ変換の向きが変わることも常時起こっている。さらにまた、記憶される過程は過去へと後退して消失するものではなく、あらたな現在における記憶する働きに何らかの影響を及ぼし続けるがゆえに、「記憶すること」と「記憶されること」との間には相互に浸透し合う関係があり、この関係によって現在は不断に重層的な厚みを増していくのである。しかし、この事実を踏まえたとしてもなお、そのつど厚みを増していく記憶する働きが、記憶される過程へと移行していくという側面を認めないわけにはいかない。

この過程においては何が起こっているのであろうか。それを予測することはできない。咀嚼することが私の意志にゆだねられて

いても、その後の消化吸収は私の意志を超えており、吸収されたものの行方を知りえないように、記憶されていく過程についてはその詳細をつまびらかにすることができない。記憶する働きを私の意志に根ざした能動的作用だとすれば、記憶される過程は私の意志を越えた受動的出来事であるが、見方を変えて言えば、この出来事は、意識がそれ自身で自らの流れを構成する自発的なものである。それゆえ、この出来事は私の意志を裏切るかもしれないし、私の意志に反したものになるかもしれない。場合によっては、私はこの出来事によって翻弄されるだけの非力な存在になるかもしれない。いずれにせよ、確実なことは、私において、私が主体とはなり得ないような出来事が不可避的に生起し続けるということである。

こうした出来事は、現在の経験が次第に過去化し、私の内部へと沈澱していく過程である。記憶について言えば、現在における私の記憶する働きは、そのつど意識が自ら構成する流れへと流れこみ、過去へと沈澱していくのである。沈澱していく場所としての私の内部は、その場所を特定できないし、外側から観察できるような空間的位置を持たないけれども、沈澱するものを受容し続ける不可視の次元として私のなかにある。また現在の経験がどのようにして沈澱し、その後再び想起されるのか、それとも忘却されたままになるのかは不明であるし、沈澱したものがたどる運命を知るべくもないが、沈澱という現象は紛れもなく現在の新たな現在への移行の裏側で、生起し続けているのである。表舞台で進

行する現在が現在の経験として可能になるのは、それが、裏舞台で生起する沈澱とひとつになって経過するからであり、その過程で、現在が沈澱する過去の次元を不断に豊かにし、後者もまた現在の在り様を内側から変え続けるがゆえに、経験は生成する歴史となるのである。記憶に戻して言えば、記憶する私の現在が記憶される過程とひとつになって進行するなかで、記憶の庭が育っていくのである。記憶は一方では、先にも述べたように、私が育てるものであり、他方では、私において育っていくものなのであり、端的に言えば、記憶は、能動性と受動性とが相互に働きかけあう関係のなかで織りあげられていくものなのである。われわれの経験においては、こうした関係をつうじて形成される、記憶に後続する沈澱の過程をいくら評価してもしすぎることはない。この過程によって、生の厚みが増し、生の出来事が意味の歴史へと結びついていくのである。

こうした沈澱という出来事に支えられて初めて可能になるのが、想起するという経験である。自己の探究のためには、現在における記憶経験の諸相のみならず、私において育った記憶の場所としての過去の沈澱層と自己との関係についても考察しなければならない。その関係について、次に述べてみたい。

IV 想起の経験—想いだすことと想いだされること—

想起の経験は、現在の知覚経験から身を引くことであり、もは

や現に存在するものではないものへと注意の視線を向け、その視線を継続させることである。言い換えれば、過ぎ去ったものを現在へと引き戻す試みであり、同時に、引き戻されたものを前にしてその意味を考えることであり、それと対話することである。何を想起するかは現在の関心によつてそのつど異なるが、何かがよく想起されるためには、少なくとも自分で記憶をつくる過程において注意深い態度を保つことが前提となるであろう。深く生きられた生はよく記憶される生であり、同時によく想い出される生である。なんとなく生きられる生、散漫な生は、記憶されることの乏しい生であり、したがつて、想起されることの少ない生である。顧みて想い出すことの少ない生は、空虚に生きられた生でしかない。充実した想起の経験が成立するためには、まずは現在が充実したものでなければならぬのである。

想起の経験は、自分によつて生きられた時間に係わることでもある。長田の言葉を借りれば、「自分の時間へ」向かうことである。長田は言う。「自分の時間というのには、わたしの考えでは、自分にとつて非常に大切な記憶をとどめている、あるいはとどめられる時間が、自分の時間とよぶことのできる時間です」¹⁵。つまり、自分の時間とは、自分の生きる時間が、生きられた時間＝沈澱した記憶と化した時間であり、後から私が現在に呼び戻すことのできる時間である。自分の時間は過去へと移行するだけでなく、過去からよみがえるのであり、後者に関与するのが、すでに述べたように、想起の働きである。想起について、長田は述べて

いる。「自分のもつている時間の井戸から、記憶の水を汲みあげするための時間が、一人の『私』という空のバケツを満たす、充実の時間であるだろうというふうに思うのです」¹⁶。言い換えれば、私のなかに沈澱したものを現在にもたらすということであり、長田は、その試みによつて「私」が充実した時間を生きることが可能になると考えている。

しかし、そうした充足感が私において享受されうるものであり、自分の時間が自分に固有なものであつても、その時間に含まれるのは、言うまでもなく、自分と他との関係の生きられた諸相である。それゆえ、自分の時間へ向かうことは、他のものへ向かうことである。長田は「自分の時間」と題するエッセーで次のように述べている。「人生とよばれるものは、わたしには、過ぎていった時間が無数の欠落のうえにうつつしている、或る風景の集積だ。親しいのは、そうした風景のなかにいる人たちの記憶だ。自分の時間としての人生というのには、人生という川の川面に影像としてのこる他の人びとによつて、明るくされているのだと思う」¹⁷。過ぎ去つた経験のすべてが想起されるわけではない。一度限りの想起で終わるものもあれば、何度でも想い出されるものもあるだろう。しかし、いずれのものも自分と自分を育ててくれるものとの交流から成るのであり、そうした交流によつて「明るくされている」のが自分の時間なのである。長田は、『自分の時間へ』と題するエッセーの「あとがき」でも次のように述べている。「自分の時間は、ほんとうは、他の人びとによつてつくられているの

はいかない。あるいは、性的なイメージのように、過去から浮上してくるものの刺激が強い場合は、われわれは自制力を欠いた一匹の野獣と化すことさええないではない。また忘れようにも忘れない記憶は、私の意に反して私に到来し、私を脅かし続けるのであり、受動的想起には、われわれの生の秩序を破壊するような力も秘められているのである。未来を予測したとしても、それがあてにならないのも、ひとつには、われわれが不断に内側からの脅威にさらされているからに他ならない。過去の沈澱層から浮上するものは、主体の意志を挫き、その生を主体の思いもよらぬ方向へと導くのであり、それゆえに、われわれの生は危険に満ちたものにならざるをえないと言えよう。

想起におけるこうした受動的側面は、自己について考える場合に決して無視しえないものである。それによつて、自己の脆弱さを暴露できるからである。われわれは、実際に、自分の生きた時間による不意打ちや、内部から予測しがたい仕方で到来するものに無防備な脆い存在であり、それゆえに、われわれが時間を生きる仕方は、しばしば悲劇的なものにならざるをえないのである。悲劇的とは、自分が望まないような状況を作りだすように仕向けられ、そのなかに自分だけでなく他人も巻き込んで、結果的に悔いの残ることになるような生に身をゆだねることである。言い換えれば、悲劇とは、自分では望まぬままに、修復不能な出来事の当事者となることに他ならない。したがって、悲劇を回避したいと望むならば、自己の時間への積極的な関係を構築することが必

要になるだけでなく、他方で、自己への警戒も怠つてはならないであろう。すなわち、われわれは自分の想起する意志とは無関係に向こうから到来するものに引きずられるようにして良からぬことをしでかしかねない存在であると用心しておくことが大切なのである。思考について言えば、われわれが受動的に思わされてしまうものに拘束されて、無用な波紋を周囲に広げやすい存在であることも自覚しておくべきであろう。そうした自覚にもかかわらず、悲劇は避けられないとしても…。

V 結論

以上、自己の探究を目指す本稿において、長田の記憶と想起についての捉え方を手がかりにしながら、われわれが自己の現在と過去という時間的次元を生きる仕方について考察してきた。長田が強調するように、われわれは生の過程でとりわけ自己の現在と過去への関係を生きると同時に、その過程の中で形づくられる出来事によつて生かされるような両義的存在である。われわれは、能動性と受動性の絡み合う生のなかで、ある程度まで自己を形成しながらも、他方で受動的に生起する出来事によつて形成されるような存在なのである。こうした側面に注目して言えば、自己は自己を能動的に形成しつつ、受動的な過程によつて形づくられ、両者が相互に浸透しあう過程のなかで、さらにそうした形成と被形成を生きていく存在だと言わねばならない。しかし、補足的に

述べたように、受動的想起には、生の形成よりも生の解体に結びつく側面もあり、この点については稿を改めてさらに検討しなければならぬ。また自己と時間、自己の時間について考えるためには、現在と過去を視野に納めるだけでなく、未来という次元との関わりも含めて考察しなければならぬ。その場合には、現在と過去、未来が内的にどのような結びつきを反省し、生の重層的生成の過程にメスを入れなければならないであろう。この点についても、機会を改めてさらに検討してみたい。

注

- (1) アウグスティヌス、山田晶訳『告白』中央公論社、一九六八年、四一四ページ。
- (2) 長田弘『記憶のつくり方』晶文社、一九九八年、一二二ページ。
- (3) 長田弘『すべてきみに宛てた手紙』晶文社、二〇〇一年、五八ページ。
- (4) セネカ、茂手木元蔵訳『人生の短さについて』岩波文庫、一九八〇年、一二二ページ。
- (5) 長田弘『すべてきみに宛てた手紙』、五七ページ。
- (6) 長田弘『一人称で語る権利』平凡社、一九九八年、一三九ページ参照。
- (7) 長田弘『世界は1冊の本』晶文社、一九九四年、五三ページ。
- (8) 長田弘、同右、一一三ページ。
- (9) 長田弘『一日の終わりの詩集』みすず書房、二〇〇〇年、三四〜三六ページ。
- (10) セネカ『人生の短さについて』、二二二ページ。
- (11) 長田弘『一日の終わりの詩集』、三七〜三九ページ。
- (12) 長田弘氏『世界は1冊の本』、六三ページ。太字は著者による。
- (13) セネカ『人生の短さについて』、二二二ページ。

- (14) 長田弘『読書から始まる』NHK出版、二〇〇一年、一五五ページ。
- (15) 同右、一一六ページ。
- (16) 同右、一一七ページ。
- (17) 長田弘『記憶のつくり方』晶文社、八七ページ。
- (18) 長田弘『自分の時間へ』講談社、一九九六年、一七九ページ。
- (19) マルセル・ブルースト、淀野、井上訳『失われた時を求めて』第一巻、新潮社、一九七四年、四六ページ参照。

(二〇〇三年五月十六日受付)
(二〇〇三年七月十八日掲載決定)